

五十川遺跡4

—五十川遺跡群第15次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第978集

2008

福岡市教育委員会

五十川遺跡4

-五十川遺跡群第15次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第978集



2008

福岡市教育委員会



SD01、02 土層（調査区南壁 北から）



SD03、04 土層（調査区南壁 北から）

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術や文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は福岡平野の中心部に延びる洪積台地上に立地した五十川遺跡群に含まれています。調査では戦国時代の館を取り囲んでいる可能性がある溝が検出され、当時の大内氏、大友氏をはじめとする戦国大名とその家臣による支配関係が注目されます。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 20 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は福岡市南区五十川二丁目277番5・277番37地内において福岡市教育委員会が2005年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面は荒牧が作成し、遺構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聰子、荒牧、淨書は濱石正子、大石菜美子、相原聰子、荒牧、遺物写真撮影は荒牧が行った。
5. 本文は荒牧が執筆、編集した。
6. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた全ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、公開・活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書掲載の遺構図座標、方位は旧日本測地系(第II系)による。方位は真北より $0^{\circ} 19'$ 西偏する。
2. 掲載した遺物は土器、石器、金属器等の各種別に通し番号を付した。

遺跡調査番号	0610		遺跡略号	GJK-15	
地番	福岡市南区五十川二丁目277番 5・277番37		分布地図番号	板付24(0088)	
開発面積	148m ²	調査対象面積	約148m ²	調査面積	56m ²
調査期間	平成18年4月24日～平成18年5月31日				

本文目次

I	はじめに	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の方法と経過	1
3.	調査体制	1
II	位置と環境	
1.	地形	1
2.	歴史的環境	1
III	遺構と遺物	
	溝 (SD)	5
	SD01・SD40	5
	SD02	9
	SD03	9
	SD04	9
	SD13	9
	土壙墓 (SK14)	9
	竪穴住居跡 (SC35)	9
	柱穴 (SP08)	10
IV	終わりに	10

挿図目次

- Fig.1 五十川遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)
- Fig.2 五十川遺跡群調査地点 (1/4,000)
- Fig.3 五十川遺跡群地形図 (昭和初期 1/4,000)
- Fig.4 第15次調査区位置図 (1/200)
- Fig.5 遺構配置図 (1/100)
- Fig.6 調査区西壁、南壁土層図 (1/40)
- Fig.7 SK14実測図 (1/40)
- Fig.8 出土遺物実測図 (1/4)
- Fig.9 御供所・井尻線調査と15次調査で検出された大溝配置図 (1/500)

写真目次

- Ph.1 調査区全体 (北から)
- Ph.2 SD01、02土層 (調査区南壁 北から)
- Ph.3 SD03、04土層 (調査区南壁 北から)
- Ph.4 SK14完掘 (北から)
- Ph.5 出土遺物
- Ph.6 SC35検出 (南東から)

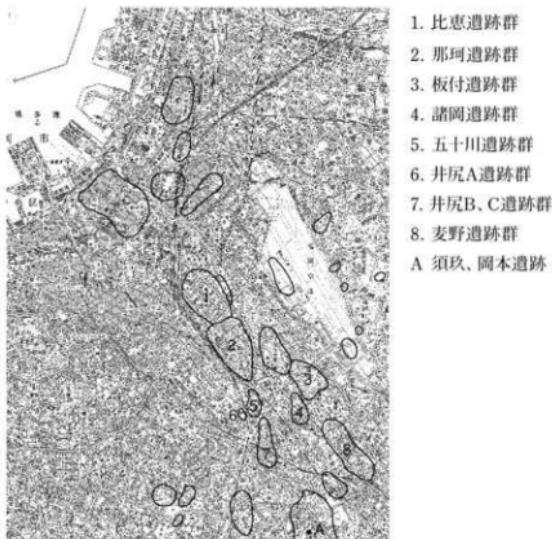


Fig.1 五十川遺跡群と周辺遺跡群 (1/10万)

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成17年11月8日、福岡市消防局総務部管理課より南消防団五十川分団車庫移転改築工事に伴い福岡市南区五十川二丁目277番5・277番37地内における「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」の文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受理し、当課で書類審査を行った。統いて平成18年1月25日に確認調査を行い、遺構を確認した。この結果に基づき両課で協議を行い、平成18年4月24日より調査を開始することになった。調査は約1ヶ月を要し平成18年5月31日に終了した。

2. 調査の方法と経過

調査地は建設予定の御供所井戸線沿いに位置する。そのため調査時に空き地となっていた道路予定地の一部を借り受け、そこを廃土置き場や駐車場、作業スペース等に使用することができた。そのため、範囲は狭かったが、調査環境は良好なものであった。検出された遺構は中世の溝が大半を占め、その掘削に労力を投じた。

3. 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会 【調査総括】埋蔵文化財第1課長 山口謙治 調査第2係長 山崎龍雄 【庶務】文化財管理課 鈴木由喜 【確認調査・協議】事前審査係長 濱石哲也 担当 井上蘭子 【調査担当】荒牧宏行 【調査作業員】大庭智子 高手與志 関哲也 濱ミミ子 安高邦晴 遠山熱 原勝輝 知花繁代 坂梨美紀 相川春彦 小野山次吉 平田周二 【資料整理】濱石正子 松下伊都子 大石菜美子 相原聰子 橋口久美子 福島真理子 中山順子 庄島さよ子

II 位置と環境

1. 地形

狹義の福岡平野には南は春日市の須玖岡本付近から博多湾に向かって阿蘇火碎流からなる中位段丘面が断続的に伸びている。本調査地点の五十川遺跡群もその一つであるが、周辺の井戸、麦野、板付、諸岡、那珂、比恵が同様の地形で南東方向へ細長く伸び、その周縁は開析を受け入り組んだ地形が多い。（五十川遺跡群の地形）北北西に細長く約800m台地が伸び、周辺には沖積地が広がる。現状では南東端が最も高く、標高11mで北側へ約9mまで減じていく。南側は略東西方向に最大約300m台地が広がる。

2. 歴史的環境

(史料から)

ここでは、本調査の中心となった戦国時代前後について周辺遺跡群も含め概略を記す。

五十川は戦国時代は五十講（ごじっこう）と呼ばれ「天文22年ごろと思われる4月13日、大内氏の家臣弘中氏の本知行地板付村が小原因幡守によって押領されたので、その替地として、五十講之村25町・下長尾村30町が大内氏から弘中氏へ宛行された。(西郷文書／芭崎宮史料)」(角川日本地名辞典 角川書店 昭和63年)という。さらに、上記の洪積台地上の集落を前掲の日本地名辞典でみると井戸は戦国末期には芭崎宮領でその後大友氏の家臣である戸次鑑連書状にててくる。麦野は文明2年(1470)頃は周防の仁保氏の知行地、板付は先のように天文22年(1553)頃までは大内氏家臣の知行地であったが、元亀3年(1572)には大友氏家臣の知行地になっている。那珂は文亀元年(1501)に大内義興な

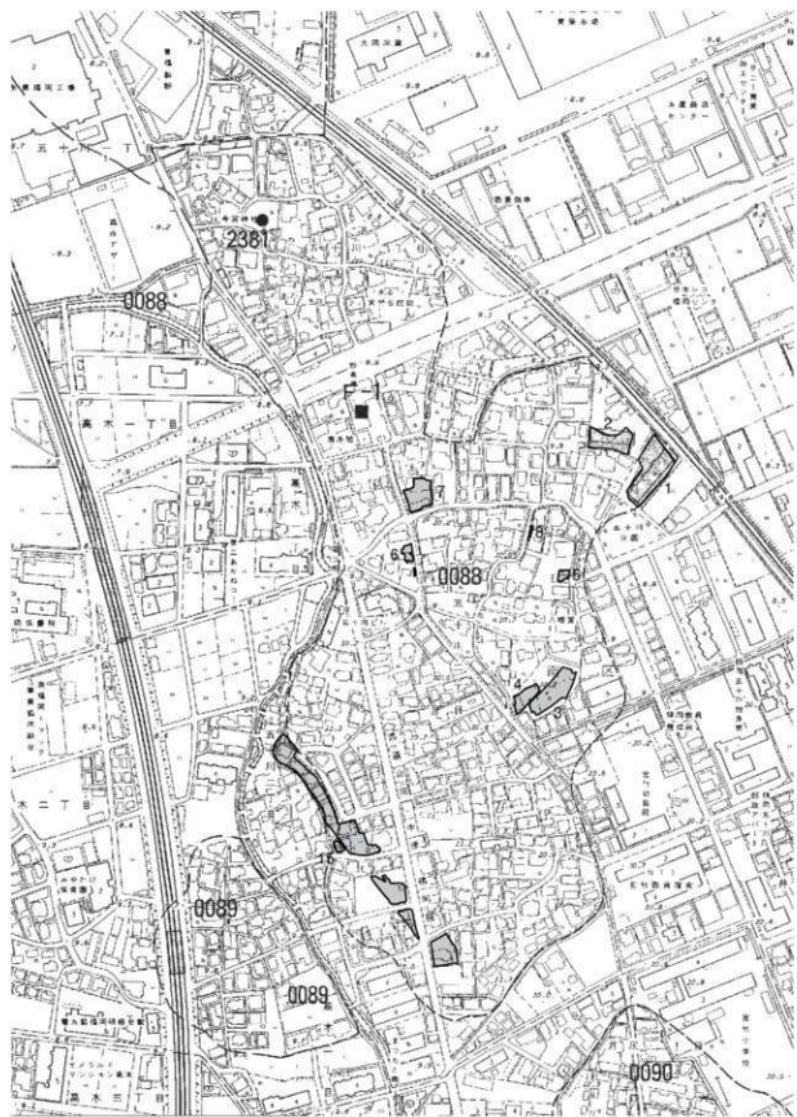


Fig.2 五十川遺跡群調査地点 (1/4,000)

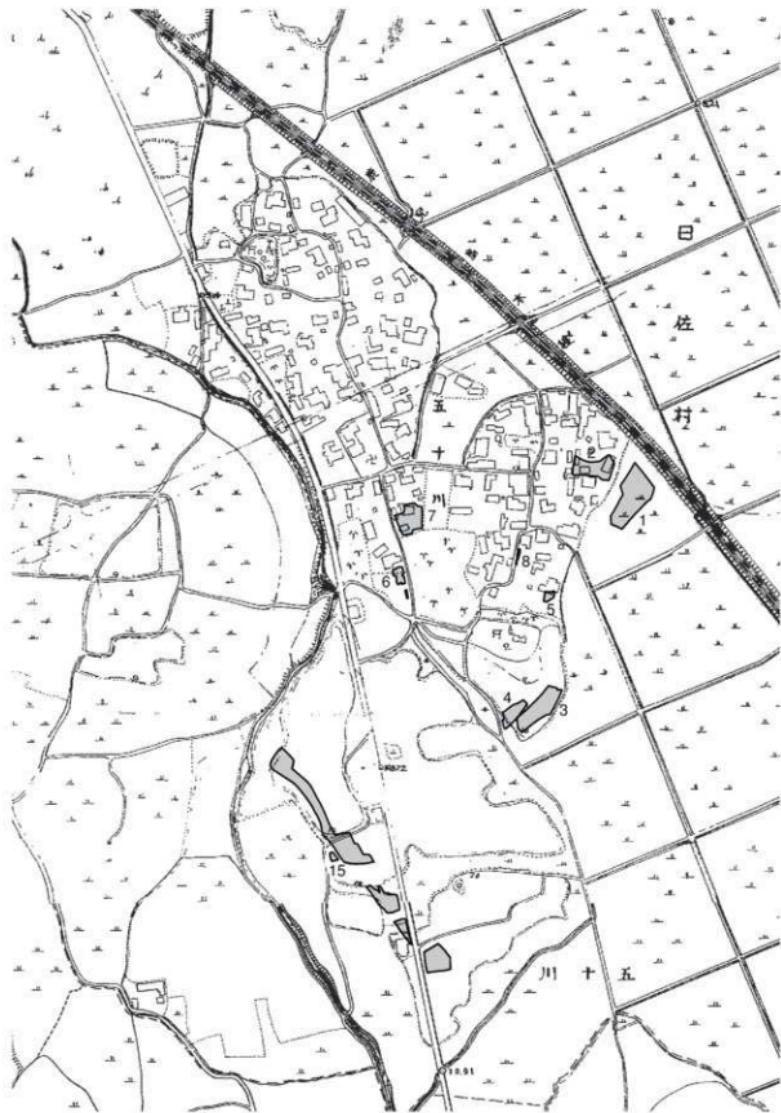


Fig.3 五十川遺跡群地形図(昭和初期 1/4,000)

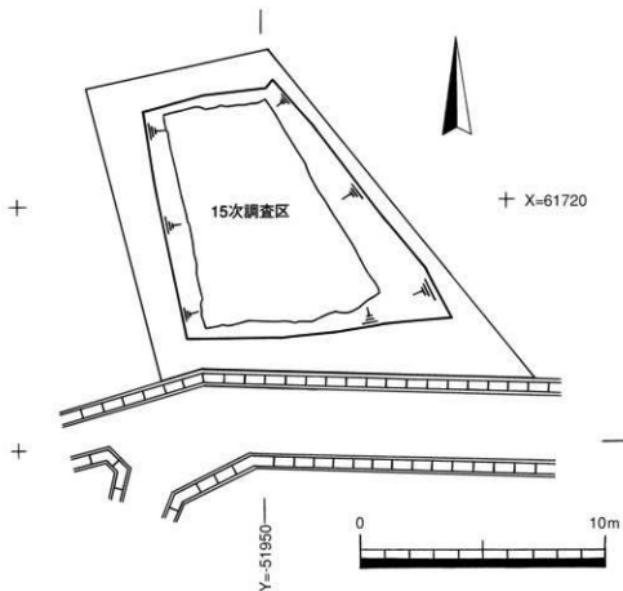


Fig.4 第15次調査区位置図 (1/200)



Ph.1 調査区全体 (北から)

那珂村30町を家臣の深野興信に安堵している。比恵は天文15年(1546)、北野天満宮領が大内氏の半済の対象となっている。

このように周辺の洪積台地上に立地した捷点集落とその周辺の沖積地(水田地)は戦国時代(15世紀後半~16世紀前半)には主に大内氏の知行地となっていたことが判る。これは文明9年(1477)に大内政弘が少弐頼忠を破り、筑前、豊前を平定し、家臣に土地を与え、知行地化が進んだことによる。天文20年(1551)陶晴賢の乱によって大内義隆が滅ぶと大友氏が筑前を支配するようになる。以後、先の板付にみられるように大友氏家臣の知行地化が進んだものと考えられる。

(既往の調査から)

五十川遺跡群では近年、中世後半期(14~16世紀代)の大溝が検出されつつある。これらの大溝は館を囲むものが含まれ、先の戦国大名家臣との関係が注意される。五十川遺跡群第3次、4次調査では大溝が検出され14、15世紀代と報告されているが、詳細な時期は不明である。現在、当該時期の大溝が広範囲に検出された御供所・井尻線の調査整理が進行中であるので、時期がつめられる可能性があり期待される。那珂遺跡でも台地周縁部で15、16世紀代の大溝が検出され注目される。

この中世後半期は史料から筑前支配をめぐりその移り変わりが激しいことが知れる。室町時代になった14世紀末からその後15世紀前半までは大内、少弐、宗、大友氏が筑前、博多の支配権をめぐって争い、15世紀中頃に大内氏が守護領国化した。その後、一時期少弐氏が回復したが、15世紀後半代は既述のように大内氏の支配におさまる。従って、検出される遺構の時期を十分検討して、史料とつきあわせを行っていく必要がある。

III 遺構と遺物

溝(SD)

御供所・井尻線の調査で検出された館を囲む堀の延長とみられる略南北方向に走行する溝が4条以上検出された。

溝(SD)

SD01・SD40

SD02と切り合っているが、検出時には確認できず、SD01全体を掘り下げた時点でSD02のプランを検出することができた。SD02より東に振れて走行しているが、北側では浅くなりプランも不明瞭となる。埋土は明緑褐色土で、立ち上がりは極めて緩やかである。深さは南側で約15cmを測る。調査区南壁面の土層(Fig.6)観察からSD01、SK14(SD02は南際では途切れているがSD02の上部も含むと考えられる)の上部を含めた緩やかな溝状の落ち込みがあることが判る。この落ち込みの西側にSD01の立ち上がりがわずかに認められる。この幅約2.5mの幅の緩やかな立ち上がりの溝をSD40と仮称すると(調査時に登録していない)、SD40は調査区北端までSD02とほぼ平行して延長しているとみられる。SD40はSD01をはじめ掘り直しが繰り返された溝を含んでいる可能性がある。

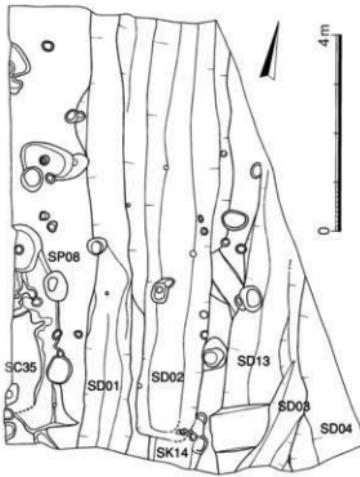


Fig.5 遺構配置図 (1/100)



Ph.2 SD01、02 土層(調査区南壁 北から)



Ph.3 SD03、04 土層(調査区南壁 北から)

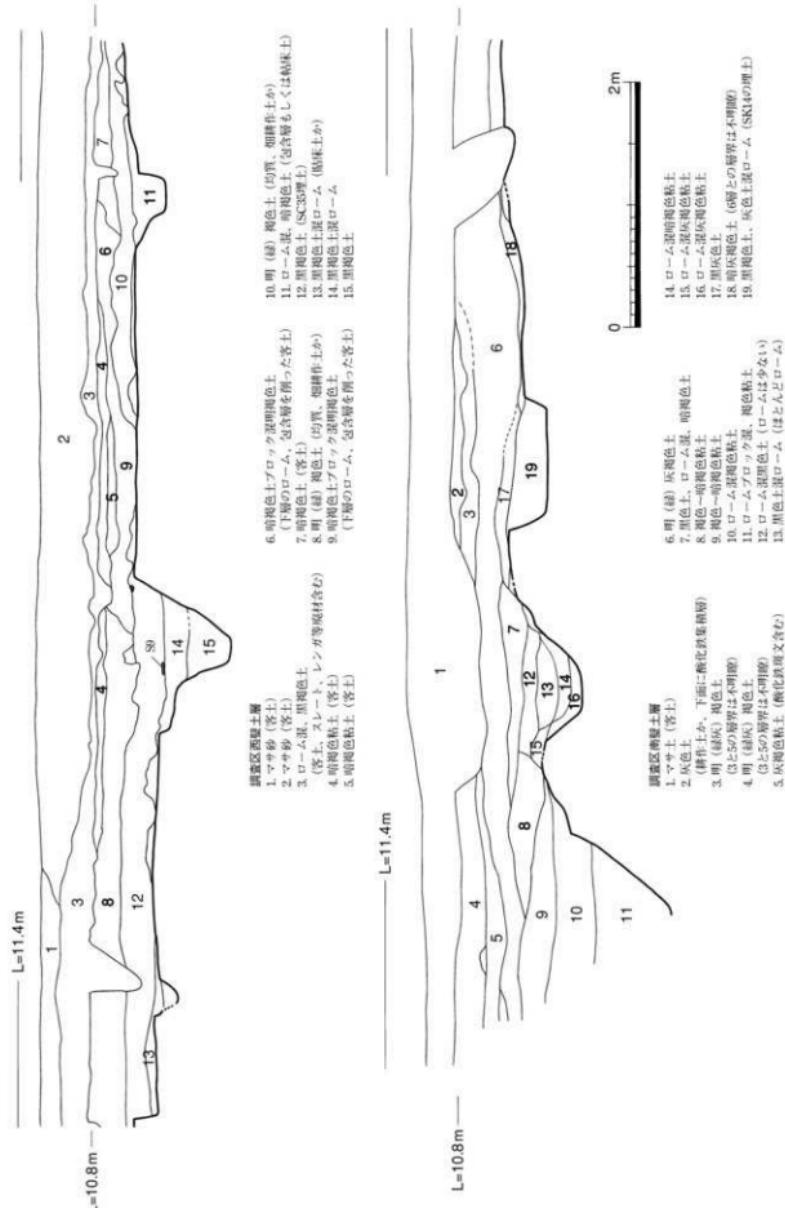


Fig.6 調査区西壁、南壁土層図 (1/40)

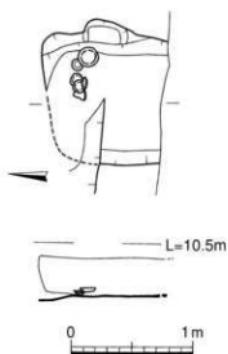


Fig.7 SK14 実測図 (1/40)



Ph.4 SK14 完掘 (北から)



Fig.8 出土遺物実測図 (1/4)



Ph.5 出土遺物



Ph.6 SC35 検出（南東から）

SD02

略南北の方向に走行する。幅1.3m、深さは30～40cmを測り、下底のレベルの南北間での比高差はほとんど無い。調査区南壁際で途切れ、陸橋が築かれている可能性がある。

SD03

調査区南東際でSD04、SD13と切り合って、検出された。他の溝に比べ東に振れて走行しSD04に切られているが、SD13との前後関係は不明である。幅90cm前後、深さ60cmを測る。

SD04

調査区南東際で検出された大溝（堀）である。明褐色を呈した埋土で立ち上がりは急である。大半が調査区外であるために全体の形状は不明であるが、御供所・井戸線の調査で検出された溝の延長となる。出土遺物(Fig.8)の6は弥生中期の甌底部、7は灰白色を呈した土師質に近い摺鉢である。

SD13

SD04の西側にSD02とほぼ平行して走行する。SD04の段堀となった肩もしくは平行する溝と考えられるが、御供所・井戸線の調査では堀の両岸が段堀状となっているので同じ形状とみられる。

土壙墓（SK14）

調査区の南端で検出された。SD02に切られている。幅105cm、大半が調査区外である為に長軸長は不明。深さは10cm、北東隅に土師皿4と土師器坏1が埋置されていた。木棺墓の可能性もあるがその痕跡は見出せなかった。

出土遺物（Fig.8 1～5）

1～5は副葬された土師器である。1～4は口径9.2cm前後、器高1.0cm前後を測る。外底は板目は残るが摩耗して切り離しは不明である。おそらく糸切りであろう。底部が薄く、上げ底になったものがある。5は口径13.4cm、器高2.5cmを測る。底部の切り離しは不明であるが、板目が残る。出土遺物の時期は13世紀前半位と思われる。

竪穴住居跡（SC35）

調査区の南西隅で検出された。プランは不明瞭で、貼床土とみられる地山の汚れが検出された。周辺の調査でも弥生終末期の竪穴住居等が検出されている。

柱穴（SP08）

調査区西壁際で検出された。掘方が比較的大きい柱穴と考えられ、中心から径20cmの柱痕が検出さ

れた。深さ70cmを測る。土層観察(Fig.6)からSC35に伴う可能性がある。出土遺物の8は埋土中から出土した弥生中期の甕である。S9は埋土の直上から出土した粘板岩製の石斧であろう。図示した上部の刃部が破損している。下端は直に切断した形状を呈す。

IV 終わりに

中世後半期の区画溝（堀）について

調査の中心となった中世後半期の溝について若干ふれておきたい。本調査は小規模で不明な点が多いが、今年度に報告する御供所・井戸線の調査と合わせて全体がみえてきた。

Fig.9で示したように本調査区の北側に直に折れた溝が接して延びている事が判明している。本調査地點はこの南側を区画した大溝（堀）の延長に位置する。Fig.3に合わせてみると洪積台地の南側部分のほぼ中央の高所に位置し中核を占めていたことが推測される。その規模は御供所・井戸線の調査で検出された溝から推定すると約半町ほどの可能性がある。溝は概ね3条が平行して延長し、本調査区でもこのことが確認できた。内側の溝が深く大規模であるのに対し、外側の溝は極端に浅い。また、外側の溝は単純ではなく斜行し切り合った溝が重なったり掘り直された状況等もみられる。注目されるのは本調査区の南端近くでこの外側の溝が立ち上がった事である。陸橋等の出入り口の機能を考えられる。

なお北側の区画溝は北西部で鈍角に折れ、同じく旧地形図から台地の、北西部に沿った方向に延びていることが予測される。

この溝（堀）の時期についてはII-2に詳細を記したように中世後半期の大内・大友支配のなかで厳密な比定が求められるが、本調査区では出土遺物が極端に少なく考察することはできない。今後の調査に期待したい。

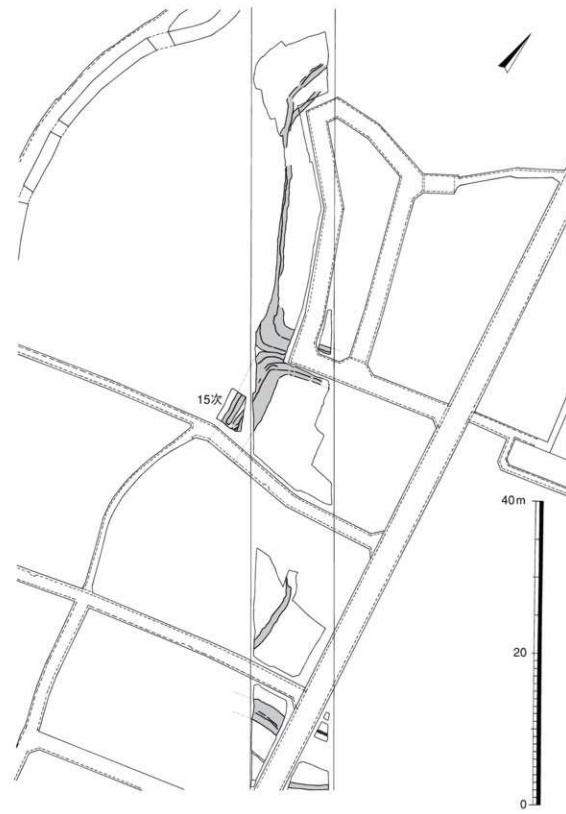


Fig.9 御供所・井尻線調査と15次調査で検出された大溝配置図(1/500)

報告書抄録

ふりがな	ごじゅつかわ					
書名	五十川遺跡4					
副書名	五十川遺跡群第15次調査報告					
卷次	4					
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第978集					
編著者名	荒牧宏行					
発行機関	福岡市教育委員会					
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 092-711-4667					
発行年月日	2008年(平成20年)3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな地 所在地	コード 市町村	遺跡番号 遺跡番号	北緯 33° 33' 31"	東経 130° 26' 16"	調査期間 20060424 20060531
五十川遺跡群 第15次	福岡市南区 五十川2丁目 277番5他	40130	0088			56m ² 消防団 車庫建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落(館跡)	弥生、鍾 倉、室町 、戦国時 代	竪穴住居 跡1溝5条 土壙塁1	陶磁器、土師器 須恵器、鉄器	宝町から戦国時代の館跡を囲む大 溝が検出された。		
遺跡概要	集落-弥生-竪穴住居1+弥生土器/集落-鍾倉-土壙塁1+土師器皿+土師器環/集落(館跡)-宝町- 戦国1溝5+土師器					
要約	道路建設に伴う調査で確認されていた宝町から戦国時代の大溝(堀?)の延長が検出された。館跡を囲む可能性があり注目される。					

五十川遺跡4

—五十川遺跡群第15次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第978集

2008年(平成20年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10-15